Title	徳川後期に於ける農村人口の一例 (概論) : 下野国都賀郡上泉村
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.6 (1935. 6) ,p.777(31)- 815(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19350601-0031
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350601-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

徳川後期に於ける農村人口の一例（概論）

——下野國都賀郡上泉村——

野村兼太郎

徳川時代に於ける農村の状態を出来る限り明白ならしめんとする目的から、當時の根本資料の蒐集に努力してゐるが、今までのところでは未だ十分だと云ひ得る程度には達してはゐない。しかし蒐集せる資料を整理してゆくとつれて、多少とも當時の農村状態の一斑を明かにし得たやうに思ふ。以下述べやうとするところも、それ等整理せる資料の一部から得たある一農村の人口状態を、それ等の資料の示すまゝに、分析してその概括的記述を試みたものである。勿論未だそれは一つの試み以上のものではなく、暫定的なものではあるが、それでもなほ徳川時代に於ける農村研究に多少の寄與はなし得るであらう。

一概に徳川時代の農村と云つても、それは多くの種類がある。石高の大小の開きもかなり甚しいし、又純粹の農村と他に副業を多く有する農村（例へば交通路に當れる村とか漁村に類する村）とでは相當本質的な差違の存するこ

とを認めなければならぬ。又その統治上の相違、天領、大名領、旗本領、寺社領等に依つて、その農村負擔の差違を生ずる。又さらに一村に多くの領主が混入せる場合の如き、その農村生活を著しく複雑にすることもあらう。しかし今こゝにはこれ等のそれぞれを十分に比較論評し得る時期には達して居らぬ。今は唯純粹農村と思はるゝ一村について、その人口變動を出来る限り明かにしようと思ふのである。こゝに純粹農村と云ふのは、その所得の大部分が米作に依り、他に何等かの収入があるとしても、極めて僅少な村落である。それ等の一つとして、私は下野國都賀郡上泉村(今日の栃木縣下都賀郡中村大字上泉)を採り上げようと思ふ。

上泉村は古河藩に屬する。古河御城主御代々明細記」と云ふ寫本に據ると、慶長十七年小笠原左衛門佐(二萬石餘)元和五年奥平美作守(十一萬石)、同六年永井右近大夫(七萬石)、寛永十年土井大炊頭(十六萬石)、次いで天和元年堀田筑前守(十三萬石)、貞享二年松平日向守(九萬石)、元祿七年松平伊豆守(七萬石)、正徳二年本多中務太輔(五萬石)、寶曆九年松平周防守(五萬石餘)を経て、再び寶曆十三年より土井氏となり、幕末に及んでゐる。かく度々領主を變じてはゐるが、最も長期に亘つて支配してゐたのは、土井氏である。殊に今この論文の依據する資料は寶曆以後であつて、大部分同氏治下のものである。

この上泉村を以つて純粹農村とするのは、石高六百五十石ほどの當時としては先づ中以上の村ではあるが、その副業的産物は甚だ少なかつたと思はれるからである。徳川時代についての直接の資料は未整理で述べ得ないが、明治十二年特有物産表に依れば、實綿九千九百九十一斤、繭二百二十五斤、生米五斤二分五厘、茶種二石九斗二升、胡麻二石を擧げてゐるに過ぎない。又明治九年一月一日現在の職分總計に依れば、僧一人、祠掌一人、農五十六人、工七人、商六人、雜業二人である。全人口三百八十五人の内、農民及びその家族は三百四十三人を占めてゐる。純粹農村の一例と見るべきものである。

二

徳川時代に於ける農村人口の變動を知る上に、最も貴重なる根本資料は、切支丹宗門人別帳である。それは初期に於いては切支丹の禁令を徹底的に實施せんがためになされたものであらうが、後にはその方面は次第に形式化して、むしろ一種の戸籍調査の體様を具へるやうになつた。故にすでに二三の先覺が各自その利用し得る宗門改帳に依つて、有用な論文をものされてゐる。(例へば小野武夫「村落人口の變遷に關する一考察」社會經濟史學第一卷第一號、土屋喬雄「宗門改帳の社會・經濟史的考察」同上第三卷第八號等)。本論文に於いてもその中心的資料は切支丹宗門人別帳と人別五人組帳とである。しかし後に述ぶるが如き理由から、その掲ぐる數字は必ずしもそのままに信賴することが出来ない點がある。

今本論文の資料を概括して置けば次ぎの如くである。

1 切支丹宗門御改帳

二十六冊

寶曆九、十、十二、十三、明和三、四、九、安永二、天明二、五、寛政五、九、十一、文化四、五、六、八、九、十、十一、十四、十五、文政二、三(斷簡)、四年

徳川後期に於ける農村人口の一例

徳川後期に於ける農村人口の一例

三四 (七八〇)

2 人別五人組御改帳

十四冊

正徳六、明和二、四、安永七、天明六、寛政五、九、文化六、九、十一、十二、十四(二冊)、十五年、
(右の内寛政五、九、文化六、十一の四冊は宗門改帳と同冊)

3 切支丹宗門御改増減指引帳

四冊

安永四、九、文化元、文政二年、

(右は別冊になつてゐたもののみを掲ぐ)

4 人別目録

二十三通

天保五年より文久三年まで、外不明二、

(右の内天保十二、十三、十四、嘉永元、五、六、安政元、三、四年を缺く)。

5 宗門人別に關する書類

二十六通

(宗門御改人數目録、宗門御改ニ差上卜書付等)

6 人別諸入用割賦帳

十冊

文政六年(人別割取集帳)、天保七、八、九、十、十一、十二、十四、安政三、六年

7 第八大區貳小區都賀郡上泉村戸籍

一冊

明治八年

8 田畑質地作切書入扣帳(天明六年)

一冊

9 質屋商人書上帳(天保十四年)その他。

本論に入る前に一通りこれ等の資料の主なるものについてその性質を明かにして置かなければならない。宗門改帳に種々あることは前掲土屋氏の論文にも詳細に述べられてゐるから、こゝには論じない。上泉村の宗門改帳は普通半紙の二つ折縦帳(唯一冊横帳あり)であるが、何れも下書であつて、宗門改役所に提出した分ではない。人數増減指引帳は(3)に擧げたやうに別冊になつてゐるものもあるが、多くは宗門改帳の末尾に附加されてゐる。しかしそれは下書なるが故で、提出の分は各冊別に作られたものではなからうか。増入帳、減入帳又は増減帳、増減指引帳等といろいろ區別して附加してゐるものもある。文化十五年の宗門帳下書の最後に、提出すべき書類として、宗門御改帳一冊、増減帳一冊、三ヶ條(誓紙か)一札一本、人數目録一本、寺自分一札一本、と記してある點から見ても、正式には別冊に作らなければならなかつたのであらう。

上泉村の場合、特に私にとつて珍しく思はれたのは、人別五人組御改帳である。普通五人組帳の形式は單に前書の後に、各戸の代表者を數人宛區分し、それぞれその代表者が記名調印するに過ぎないのであるが、この上泉村の人別五人組御改帳は各戸の下に、その家族をも連記してゐる。従つて宗門改帳同様、時にはそれ以上に人口の異動を知る上に、大いに役立つたのである。今兩書の異同を兩者共に存する明和四年の分について見ると、次ぎの如くである。

五人組帳

宗門改帳

五人組法度前書

なし(最後に起請文あり)

五人組区分

なし(宗門旦那寺各戸別に記載)

各戸の家族名及び年齢

同上

各戸の持高

なし

下男下女

なし

馬

同上

役名区分(名主、年寄、百姓等)

名主のみ記載

従つて各戸の盛衰等を知る上には、この村の場合には五人組帳の方がより有効であつた。この二種の殆ど同じやうな戸口調査を毎年作つたやうに思はれる。しかし後には下書の場合も少なくとも兩者を合せて書上げてゐる。同様のことを列記する無駄を省略したのであらう。

この兩者を基礎として、寶曆九年(一七五九)以後の同村の人口を考察して見たのであるが、相憎文政四年(一八二一)までよりない。その以後は不完全な人別目録に依るより外にない。人別目録については後に述べるが、上記の二種の人別帳の確實さについて少しく注意して置かなければならない。これ等の人別帳は實際の戸別調査の上になされたやうである。それは毎年の「村方諸入用帳」や「人別御改諸入用割賦帳」を見ると、前者には宗門改の用紙代、食事その他が挙げられ、後者には宿賄掛り、晝喰辨當代等が記載されてゐるからである。さうした費用が何程かゝるか

と、云ふに、天保十年の例を探ると、宿賄掛り五貫六百六拾三文、晝喰辨當代が壹貫貳百六拾四文、合せて六貫九百三拾一文、これを當時の人口二百三拾五人に割宛て、一人三拾文として割賦してゐる。一人頭三拾文と云ふのは費用のかゝり過ぎた方で、少ない時は拾數文で済んでゐることがある。しかし多い時は四十文近くかゝつてゐる。但しこれ等の點は他日農民の負擔状態を調査する時にゆづる。晝喰代を四拾文から五拾文とすると、(城下古河等では百文ぐらゐ)三十日分位に當る。これほど多くの延日數を要したとは、一寸考へられない。その農村の形態も何れかと云へば聚落を作つてゐる同村に於いて、かゝる多くの晝喰代を要するわけがない。恐らくこの内には他の諸費用をも含めてゐるのではなからうか。例へば宗門改帳等を役所に納入に出かける費用等も入込めてあらう。天保十五年の「村方諸入用扣帳」を見ると、八月十日のところ、貳百七拾貳文、宗門之節大水舟ちん途中晝喰代と云ふのがある。従つて實際調査に要した延日數はもつと少ないに違ひない。この問題はこゝにはあまり關係がないから、詳細の調査は他の機會に譲る。要するに相當眞面目に戸口調査を行なつたものと見てよい。

それならば全然その數字を信頼してよいかと云ふと、これはかなりの疑問がある。調査そのものがかなり疎漏であり、年齢の如きはかなり間違ひが多かつたやうである。しかしさうした不注意から生じた間違ひはそれほど問題とするに足りない。今日になつて最も困るのは故意に不在者を記載してゐることである。上記の人別帳が下書であるために、諸所に人名の下に張紙をして、人別帳ばかりと出奔人等と記してあつた。これはすでに當村に居らず、出奔してしまつてゐるにも拘らず、帳簿上だけは記載届出でられてゐる者である。出奔人については「出奔人帳外

帳」に記載さるべき筈であるのに、それには毎年きまりきつた者だけを掲げ、かなり多くの無届があつたらしい。張紙の添附されてゐるのは僅かに過ぎないが、剝落してしまつたものもあつたらうと思ふ。例へば前掲の天保拾年の「人別御改諸入用割賦帳」には總人口が貳百三十五人となつてゐるが、同じ年の人別目録に依る人口数は貳百七十九人で、四十四人の差がある。この點については、さらに後に述べよう。以上の如く實際その村に居住しない者、即ち出奔人とか他村に出稼ぎしてゐる者等も記載されてゐるのであるから、實際はその總數を何パーセントか減じなければならぬのである。前掲諸家の論文に於いて、全然この點を顧慮せられず、人別帳に掲ぐるところの人口數に絶對的信賴を置いて論ぜられてゐるのは如何かと思ふ。しかし徳川時代の人口状態を明かにするためには、人別帳が最も信憑すべきものなのだから、多少の補正を加へて、これ等に基くより外にないであらう。

例へば人別帳以外に、人口數を書上げたものに、「家數人別取調書上帳」とか、「村明細帳」等があるが、それ等の人口數は時にある目的のために、著しく變更が加へられ、「人別帳」よりも遙かに信賴し得ないものである。上泉村については、それ等の文書を缺くため、如何に歪められてゐたか示すことは出来ないが、他の村の二例を示して、これ等の文書に依據する場合には如何に周到の用意が必要であるかを注意して置かう。下野國芳賀郡上太田和村の天保十三年に於ける「村之家數人別取調書上帳」が助郷のための特別調査を目的としたものであつたために、翌十四年に書上られた同年、即ち「去寅年家數人別増減書上帳」よりも、著しく壯年男子の人數を減少して届出でたが如きである。要するに吾人は「人別帳」を以つて、上述の如き缺陷はあるとしても、なほ根本的な資料とせざるを得ないものである。

次ぎに(4)の人別目録であるが、これは前にも指摘したやうに宗門改帳等と共に提出したものらしいが、未だ私は他の村に於いて同一文書を發見し得ない。要するに人口調査の總括的書上げである。又「人高目録」「人別寄目録」と題したものもある。如何なる様式であるかを示すために、次ぎに一例として天保五年の分を擧げる。

「人別寄目録」

- 去巳年引合無増減
- 一人高貳百七拾五人 内男百四拾人 女百三拾五人
- 出奉公人無御座
- 抱奉公人無御座
- 御足輕奉公人無御座
- 出奔ニ付永尋貳拾人
- 帳外者三拾五人
- 去巳年引合九人増
- 一男七拾八人 拾五才方六拾歳迄
- 去巳年引合無増減 田奔人共
- 一家數六拾軒
- 一馬 拾五疋 但し牡馬
- 一増人九人 内四人男 但し出生 五人女

徳川後期に於ける農村人口の一例

徳川後期に於ける農村人口の一例

一 減人九人 内 貳人男 但し 六人死失
七人女 三人縁組

寺

去己年引合無増減

一人數 壹人

去己年引合右同斷

一家 貳軒

穢多

去己年引合無増減

一人數 拾貳人 内 七人男
五人女

去己年引合無増減

一家數 貳軒

右之通り人別御改ニ付寄目録相違無御座以上

年々に依つて、多少の形式の相違はあるが、大體のところは右と同様である。もし本書が宗門改帳に添附して提出されたとしたなら、大體に於いて人別帳同様の信頼を置いてよいと思ふ。唯私の手にある人別目録は天保五年以後のもののみで、それ以前のものがなく、又それ以前にもあつたのか如何かも解らない。かつ人別帳の方は前記の如く文政四年以前のもののみであるから、兩者を對比して、その正確さを確める方法がない。しかしある部分については少しく怪しい點がある。例へば壯年男子の數や出奔者がかなり永い年月の間一定であるべき筈がないのに殆ど變更してないが如きである。この點から見て頗る依據し難くはあるが、天保以後は他に據るべきものがないので

これに従ふことにした。

(5)の文書の内に、血判人目録と云ふのがあるが、それは恐らく一定の年齢に達すると邪宗徒ならざること誓つて血判したものであらう。次ぎの如き形式のものである。

「血判人目録

家持清之丞

清太郎

家持豊吉

豊治

貳人

右者當未春血判人目録之通相違無御座以上

天保六年未年三月

下野國都賀郡上泉村

名 主 官 藏

宗門御改御役所

又「宗門御改人數目録」と云ふのがあるが、それは前掲の「人別目録」をさらに簡單にしたやうなものである。ところが同じ年の分を兩者比較して見ると相當の差違がある。今「宗門御改人數目録」の天保六年の例を採ると次ぎの如

徳川後期に於ける農村人口の一例

きものである。

「宗門御改人数目録」

一人數貳百六拾七人	内	男百三拾六人	眞言宗
		女百三拾壹人	
外ニ穢多共			

一人數拾貳人

	内	男七人	眞言宗
		女五人	

右之通當未奉宗門御改被仰付ニ付御帳面之人数目録之通不殘相改申處相違無御座以上

天保六年三月

下野國都賀郡上泉村

名主官藏

宗門御改御役所

右の文言に依つて見ると本書の方が人別帳に添附して差出したやうにも思へる。ところがこれを同年の「人別目録」の總人口數と比較して見ると、人別目録の方は人數合貳百七拾四人、内男百三拾九人の女百三拾五人、即ち前者よりも、男三人、女四人、合せて七人多くなつてゐる。日附は人別帳は何れも三月である。「宗門御改人数目録」も三月であるが、「人別目録」の方は三月のもあるが、四月のものもある。天保六年の分は四月である。これ等の日附は何を指すのか考へて見る必要がある。それ等は届出の日附ではないらしい。大體調査の日附らしく思はれるが、もしかすると全然慣習的な日附かも知れない。特に「宗門改帳」はさうらしく思はれる。正月と云ふのが一つあるが、他は

盡く三月である。ところが實際に宗門改帳を納めるのに八月頃までかゝつたらしい。未だ他の資料を全部整理通覽してゐないから、明瞭には斷言し得ないが、文化十二年の「諸入用扣帳」に據ると、五月廿四日の項に、「人別帳納」、六月二日の條に「宗門血判帳納」、八月八日には「宗門帳納泊り」とある。最初の人別帳納は人別五人組帳ではないかと思ふ、この方の日附は區々ではあるが、矢張り三月が最も多く、四月、六月、七月等がある。文化十三年「諸入用扣帳」にも宗門帳納、八月七日夕々八日晝迄とあり、賄代、その他入用七百二拾四文と記されてある。以上の如く三月に出来上つたとすれば、八月に納めるのは、あまりにも怠慢のやうに思はれる。従つて帳面に記してある日附は實際上海等の意義をも有さぬと云つてよい。しかし大體に於いて毎年八月前後に調査したものとらしく、増減帳等にも「去ル八月御改以後出生仕仕」等と記してあるものが、かなりある。かく調査日附を明確に一定してゐないことは、人口統計のやうな場合、最も不備と見なければならぬが、他方前述のやうな同じ役所に届出づる書面に於いてさへ、かなりの人口數の相違を生ずるやうになつた所以ではないかとも考へられる。

以上の如き性質の資料であるからして、これ等を統計技術の進歩せる今日の數字と勿論同一に取扱ひ得ない。唯上述の諸事情を念頭に置きつゝ、これ等の資料を出来る限り利用して、當時の人口變化の大體の傾向を明白にしようと思ふのである。

三

先づ最初に總人口の一般的變化について觀察しよう。

徳川後期に於ける農村人口の一例

徳川後期に於ける農村人口の二例

四四 (七九〇)

年	戸數	男	女	特 殊 階 級	總計
正徳丙申六年(一七二六)	七一	二二四	一五〇	僧 六 行人 一 道心 一 小計 八	三七二
寶曆己卯九年(一七五九)	六九	一七二	一四〇	二	三二四
同 庚辰十年(一七六〇)	六九	一四五	一三七	不明	二八二
同 辛巳十一年(一七六一)	七〇	一五三	一三九	不明	二九二
同 壬午十二年(一七六二)	六九	一四八	一二六	二	二七六
同 癸未十三年(一七六三)	六九	一四八	一三一	二	二八一
明和乙酉二年(一七六五)	七〇	一五六	一三〇	二	二八八
同 丙戌三年(一七六六)	七一	一五九	一三一	二	二九七
同 丁亥四年(一七六七)	七〇	一五一	一二九	二	二八七
同 壬辰九年(一七七二)	六八	一六五	一四六	三	三一四
安永癸巳二年(一七七三)	六八	一六一	一四四	三	三〇八
同 戊戌七年(一七七八)	六九	一五九	一四八	二	三〇九
天明壬寅二年(一七八二)	六四	一六〇	一四六	二	三〇八
同 乙巳五年(一七八五)	六四	一五二	一四六	二	三〇〇
同 丙午六年(一七八六)	六五	一五〇	一四六	二	二九八
寛政癸丑五年(一七九三)	六七	一五〇	一四九	二	三〇一
同 丁巳九年(一七九七)	六七	一五四	一五三	二	三〇九

同 己未十一年(一七九九)	六八	一六〇	一五七	二	三一九
文化丁卯四年(一八〇七)	六六	一五五	一五一	二	三〇八
同 戊辰五年(一八〇八)	六六	一四七	一五四	二	三〇三
同 己巳六年(一八〇九)	六八	一四八	一五六	二	三〇六
同 辛未八年(一八一〇)	六八	一四七	一五六	二	三〇五
同 壬申九年(一八一〇)	六六	一四七	一四八	一	二九六
同 癸酉十年(一八一三)	六六	一四七	一四七	一	二九五
同 甲戌十一年(一八一四)	六七	一四九	一三九	一	二八九
同 乙亥十二年(一八一五)	六四	一三七	一三三	二	二七二
同 丁丑十四年(一八一七)	六二	一三七	一四五	一	二八三
同 戊寅十五年(一八一八)	六二	一三四	一四二	一	二七七
文政己卯二年(一八一九)	六三	一三六	一四〇	一	二七七
同 辛巳四年(一八二一)	六一	一三五	一三五	一	二七一

以上は人別五人組帳と人別宗門改帳より作成した表であるが、正徳六年から寶曆九年までは四十數年を経過してゐるから、これは一寸比較にはならない。しかし戸數及び人數共に減少を示してゐる。寶曆九年と十年との間に、著しい人員の差があるのは、前者が奉公人を計算してゐるのに對して、後者は全然これを抜かしてゐるからである。前者より奉公人數二十三名を減じ、後者に僧侶二名を加へれば、その差は大して著しくなくなる。寶曆九年以後、寛

徳川後期に於ける農村人口の一例

四五 (七九一)

政十一年までは、多少の無理はあるが、各戸個々の盛衰を跡づけることが出来たが、寛政から文化に掛けての資料不足のために、その跡を辿ることが困難である。上述の期間の調査の結果は後に述べる。概して上述の数字からは全體の人口減少、家の減退が極めて徐々ではあるが起つてゐることが示されてゐる。男女の数は略々平均してゐるが、文化五年以前は男子の數多く、同年以後は女子の數が優つてゐる。

この時代以後については、「人別目録」に従つて略々同様の表を作成して見よう。

年	號	人口總數	男	女	家數	寺	僧侶	職多	小屋
天保甲午五年(一八三四)		二七五	一四〇	一三五	六〇	二	一	七	五
同 乙未六年(一八三五)		二七四	一三九	一三五	六〇	二	一	七	五
同 丙申七年(一八三六)		二七五	一三九	一三六	六〇	二	一	七	五
同 丁酉八年(一八三七)		二七六	一三九	一三七	六〇	二	一	七	五
同 戊戌九年(一八三八)		二八〇	一四〇	一四〇	六〇	二	一	七	五
同 己亥十年(一八三九)		二七九	一三七	一四二	六〇	二	一	七	五
同 庚子十一年(一八四〇)		二八五	一四二	一四三	六〇	二	一	五	三
同 甲辰十五年(一八四四)		二九〇	一四八	一四二	六〇	二	一	五	四
弘化乙巳二年(一八四五)		二九〇	一四五	一四五	六〇	二	一	五	四
同 丙午三年(一八四六)		二八九	一四七	一四二	六〇	二	一	五	四
同 丁未四年(一八四七)		二九二	一四五	一四七	六〇	二	一	五	四

嘉永己酉二年(一八四九)		三〇〇	一五三	一四四(?)	六〇	二	二	五	四
同 庚戌三年(一八五〇)		三〇一	一五三	一四八	六〇	二	二	五	四
同 辛亥四年(一八五一)		三〇三	一四九	一五四	六〇	二	一	五	四
安政乙卯二年(一八五五)		二九八	一四四	一五四	六〇	二	二	六	五
同 戊午五年(一八五八)		二九四	一四三	一五一	六〇	二	一	六	五
同 己未六年(一八五九)		二九八	一四二	一五六	六〇	二	一	六	五
萬延庚申元年(一八六〇)		二九九	一四三	一五六	六〇	二	一	六	五
文久辛酉元年(一八六一)		三〇一	一四三	一五八	六〇	二	一	六	五
同 壬戌二年(一八六二)		二九六	一四一	一五五	六〇	二	一	六	五
同 癸亥三年(一八六三)		二九五	一四一	一五四	六〇	二	一	六	五
巳年(明治二年?) (一八六九)		三三四	一六一	一七三	六〇	一	一	六	五
午年(明治三年?) (一八七〇)		三三二	一六〇	一七二	六〇	一	一	六	五

以上の表に依れば人口は全體として著しく停滞的であると云はなければならぬ。巳年午年の最後の二項は年號が明記されてはゐないが、勿論明治初年のものであらう。僧侶がなくなつて神主になつてゐる點などは、明かに時代の風潮の激變を物語るものであらう。廢佛毀釋の思想が水戸とさまで遠くないこの地方に於いては、徳川時代からすでに潛勢力を有してゐたやうである。それが明治になると共に直ちに表面化したのであらう。この明治に於ける人口の急激な増加は「人別目録」だけでは十分にその理由を説明し得ないが、借家人その他の増加の多いところを

見ると、あるひはこの地方に歸住した者もあつたのかも知れないが、大體に於いて從來「人別帳」に入れなかつた者を新たに加へたためかとも思はれる。しかし明治八年一月の戸籍簿に依れば、戸数は七拾壹軒に増加し、人口は男百八拾貳人、女百七拾八人、合計三百六拾人を算へてゐる。明治以後の急速な人口増加を示すものである。

他方上述の「人別帳」及び「人別目録」の示す数字が實際の在住者より多いのか少ないのかの問題が残る。すでに述べたやうに、「人別帳斗り」として實際は出奔した者をも加算してゐるとすれば、當然實數より少ないこととなる。他方他所に奉公に出てる者を必ずしも常に人別から除くと限らない。除いた分もあるが、除かぬものもある。之に反して他所から來た奉公人も一部は記載されてゐるが、記載漏れも少なくないやうである。出奉公人抱奉公人書上帳」と云ふのが、文化二年分一冊よりないが、それには出奉公人として男二人、抱奉公人として女一人を擧げてゐるに過ぎない。勿論不正確なものである。

比較的後期に至ると出奔人の數は著しく増加したらしく、殊に文化度に於いては張紙せる分がかなり多くある。それにも拘らず次年度の帳面にはそのまゝ記載されてゐる。一々各年度を比較することは資料不十分のため出來ないが、かうした張紙の最も多く残れる文化十一年の分をとつて、出奔せる各戸がその後如何なる記載になつてゐるかを少しく例示して見ようと思ふ。

第一

文化十一年 文化十二年
清吉 二三歳 第二の家に入る

文化十四年

文化十五年

文政二年

文政四年

きつ母 六二歳 同上

第二

彦惣 三八歳

三九歳

四一歳

四二歳

四三歳

四五歳

その妻 三三歳

三四歳

三六歳

三七歳

三八歳

四〇歳

茂吉 伴 一四歳

八一五歳

一七歳

一八歳

一九歳

二二歳

七郎兵衛 伴 五歳

六歳

四八歳

九歳

一〇歳

一二歳

文四郎父 四三歳

弟 清吉

二六歳

二七歳

二八歳

三〇歳

喜藏 三七歳

三八歳

四〇歳

四一歳

四二歳

四四歳

きち妻 三五歳

三六歳

三八歳

三九歳

四〇歳

四二歳

ふみ娘 一三歳

一四歳

一六歳

一七歳

一八歳

二〇歳

やす娘 八歳

九歳

一一歳

一二歳

一三歳

一五歳

さん娘 四歳

五歳

七歳

八歳

九歳

一一歳

しな母 五七歳

五八歳

六〇歳

六二歳

六四歳

六四歳

助之丞 三一歳

三二歳

三四歳

三五歳

三六歳

三八歳

多い妻 三六歳

三七歳

二九歳

三〇歳

三一歳

三三歳

うた娘 六歳

七歳

九歳

一〇歳

一一歳

一三歳

徳川後期に於ける農村人口の一例

四九

(七九五)

徳川後期に於ける農村人口の一例

わか娘	二歳	三歳	五歳	五歳(?)	六歳	八歳
その母	五七歳	五八歳	六〇歳	六一歳	六二歳	六四歳
第五						
男 吉	三四歳	三五歳	三七歳	三八歳	三九歳	病死
はつ妻	二六歳	離縁				
かつ娘	七歳					
第六						
治郎兵衛	三五歳	三六歳	三七歳(?)	三九歳	四〇歳	四二歳
しの妻	三〇歳	三一歳	三三歳	三四歳	三五歳	三七歳
勝右衛門父	六八歳	六九娘	七一歳	七二歳	七三歳	七五歳
さよ母	五六歳	五七歳	五九歳	六〇歳	六一歳	六三歳
第七						
代次郎	四三歳	四四歳	四六歳	四七歳	四八歳	五〇歳
第八						
權六	三七歳	改名 作右衛門三八歳	四〇歳	四二歳	四二歳	四四歳
その妻	四二歳	四三歳	四三歳	四五歳(?)	四五歳	四七歳
常彌伴	一八歳	一九歳	二二歳	二二歳	二三歳	二五歳

文化十一年の別帳に出奔人と張紙したる分八家をとつて、文政四年まで記載の有無を確かめて見たところ、第一

例が第二の分に併合された外は、全部一家をなしてゐるが如くに記載されてゐる。上記の内年齢の記してあるのが記載してあることを示す。第五例の如く當主は出奔し、妻子は恐らく里に歸つたのであらうと思はれる分でも、なほ當主を記し、妻子を離縁した形式を採つてゐる。故に「別帳」だけを見てゆくと、恰も以前の張紙が間違であつたかの如くに考へられる。しかしそれ等の張紙が間違でないことは他の方面から證明出来る。

文化十二年の「家別馬數増減帳」中に左の記事がある。

「一馬 壹疋 彦 惣
 一同 壹疋 喜 藏

貳疋

右之者共去戌十二月出奔仕仕ニ付馬數相減申申

又文化十五年の「別五人組御改帳」の末に、家數を記し、六拾貳軒となし、その内譯に「七軒出奔百姓永尋」と記してある。人別本文に記してあるものを算へると、六拾貳軒あり、明白に前記の出奔人の名を載せてゐる。これ等出奔せる當主等は再び歸つて來たのか、又その家族はすべて帳簿記載の如く残つてゐたのか、それ等は全く不明である。又前掲の者以外になほ多くの出奔人があつたかも知れない。それ等は別帳の上では出奔人とされてゐない者である。偶々彦惣、喜藏の如く、かつては馬を有する相當の百姓であつた者が出奔したために、他のところに出入人たるものが記載されてゐたに過ぎない。その他の者は假令五人組帳の末に出奔百姓七軒と記してあつても、

徳川後期に於ける農村人口の一例

何れがそれに該当するのか全く解らないのである。以上の如く「人別帳」記載の人員は少なくともこの村の場合にはこれを削減しなければならない。どのくらゐ削減すべきかは、恐らくその時代に依つて異なるであらうが、末期に至るにつれて益々甚しくなつて来たやうである。他に何か人口の實數を知るべき資料はないかと思つて探して見たところ、前記の「人別諸入用割賦帳」なるものを得た。前述の如くこれは人別帳作成費を人頭數に割宛てたのであるが、果して正確に人數を應じて割宛てたか如何かは疑問である。それを確かめるためには、同じ年の「人別帳」と「人別諸入用割賦帳」とがあれば、比較的明白になし得る。不幸にして同年のものがないので、止むを得ず文政四年の「切支丹宗門御改帳」と文政六年の「當人別割取集帳」とを比較して見た。文政六年の割賦は一人につき拾五文となつてゐる。その結果は次ぎの如くである。一々擧げるのは煩雜であるから、その幾つかを左に例示する。

文政六年取集帳	文政四年宗門帳	文政六年取集帳	文政四年宗門帳
清之丞 六十文	一家 四人	己之助 六十文	一家 四人
作左衛門 百三十五文	源兵衛 九十文	吉左衛門 六十文	同 六人
喜八 九十文	同 六人	吉藏 百五十四文(?)	*同 五人
勇七 四十五文	同 三人	同 七十五文	同 五人
佐吉 百三十五文	*同 七人	同 七十五文	同 五人
淺右衛門 六十文	同 四人	同 七十五文	同 三人

以上の如く*印をなした分を除き、略々全家族の頭數に應じて課せられてゐる。年代が違ふために、全部を照應せしむることは出来ないが、名主以外の者は當時住居せる者すべてに課したのではないかと思ふ。前述せる調査に依つて明かに出奔人たることの解つた喜藏、彦惣等の名は見當らない。唯同年のものがないことは、甚だ遺憾ながら、これを不備のままに残さなければならぬ。そこで今所有する天保七年以降の「人別諸入用割賦帳」と前掲の「人別目録」との總人口數を比較して見ると、次ぎの如くなる。

天保七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十四年	安政二年	同三年	同六年
人別目録 二七五	二七六	二八〇	二七九	二八五	—	—	二九八	—	二九八
割賦帳 二四八	二四四	二四四	二三五	二五七	二六四	二五四	—	二七二	二七二
その差 二二七	三二	三六	四四	二八	—	—	—	—	二六

甚だしきは四十四名の差があるが、大體二割以上の差違あるものと見てよからう。文政六年の前掲の帳簿が甚だ不備で、總額も人員も記してゐない。(それが恐らく「人別割取集帳」なる所以かも知れぬ)。他の割賦帳の如く、正式でないため、人員を推定し得ず、従つてそれ以前の差違がどのくらゐの割合になるか、全然知り得ない。しかし大體に於いてすと初期にはさうした甚しい喰ひ違ひはなかつたのではないかと思ふ。なほ今後もしその以前の資料を入手し得たならば、確かめたいと思つてゐる。故に農村の人口が停滞的であると云ふ結論を覆すやうな確實な證據はない。唯上述の資料を検してゆく時、自ら感ぜらるゝことは末期に近づくにつれ、農村の窮乏が甚しくなつて來ることであり、その結果出奔人も多くなり、「人別帳」等に表れてゐる人員よりも實際人口は初期よりもつと少

なくなつてゐたらうと想像し得る。故に農村人口の減少は全體として前掲の諸表の示すよりも、もつと甚しかつたものと見てよからう。それならば何故明治初年に於いて急激に人口數が増加してゐるのか。この點については抽象的にはいろいろ答へられるが、具體的證據は今のところ何もない。從來人別帳等に加へられなかつた人々の數についても何等の確證を有さず、又前掲の明治初年の人口數が確實なるものや否やについても、今のところ何等の資料も有してゐない。それ等についてはすべて他日資料を得ることが出來た時に譲る。

四

次ぎに職業別は如何であつたか。又大部分が百姓であることは明かであるが、どの程度の農民であつたか。又さらにそれ等の間に何等かの變遷があつたか。これ等の問題について出来るだけ明かにして見ようと思ふ。

職業別については、「人別五人組帳」の末尾に頗る粗雑なものではあるが、簡単に記してある。各時代については今それ以外に據るべき資料がない。右「人別五人組帳」の後につけてあるのは、一つは人數に依り、他は軒數に依つてなされてゐる。兩者を照應して見ると、うまく一致しないところもある。如何なる標準に依つて區別したか不明である。殊に各年代に依つて稱呼が異なるため、何れに屬すべきか解らぬものもある。兎に角資料の示すまゝに、人別と軒別との二つの表を作つて見ると次ぎの如くなる。

人別に依る職業別

名主 年寄 百姓 水呑 地借 大工 木挽 杓取 屋根葺 店 道心

明和二年	一	四	六〇	一	二	二	一	一	一	一	五
同四年	一	四	五八男 三女	一	二	一	一	一	一	一	五
安永七年	一	四	五七	一	一	一	一	一	一	一	四
天明六年	一	四	五九	一	一	一	一	一	一	一	四
寛政五年	一	三	五七	四	一	一	一	一	一	一	四
文化九年	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一
同十一年	一	四	五九	一	一	一	一	一	一	一	一
同十二年	二	四	五二	二	二	一	一	一	一	一	一
同十四年	一	四	五〇	三	二	一	一	一	一	一	一
同十五年	二	四	一	一	二	一	一	一	一	一	一

軒別に依る職業別

安永七年	一	四	五七	二	一	一	一	一	一	一	二
天明六年	一	四	五四	二	一	一	一	一	一	一	二
寛政五年	一	四	五九	一	一	一	一	一	一	一	二
文化九年	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	二
同十二年	一	四	五五	一	一	一	一	一	一	一	二
同十四年	一	四	四六	一	一	一	一	一	一	一	二

徳川後期に於ける農村人口の一例

なほ同年提出したと思はれる「質屋商人書上帳」を見ると、上掲の諸商賣の性質が一層明瞭に解る。今その特徴あるものを拾つて見ると、澤右衛門は「草り草鞋、質屋、荒物商、酒升賣」とあり、半兵衛は「一膳飯、温飴そは、荒物、酒升賣、草り草鞋」、久五郎は「だくわし、團子餅、温飴そは、居升賣、質取次」、たきは「草り草鞋、白米小賣、質取次、酒升賣」とある。上記の質屋淺右衛門、兵右衛門の外に、豆腐屋として勇八の名が挙げられてゐる。

これ等の者が純然たる商人でないことは、同じ年の八月八日に届出でた書面の中で、それ等の名前を挙げ（質商豆腐屋を除く）、「右之もの儀農間居酒湯や髮結渡世仕罷在ゆ處」とあるやうに、彼等は恐らく農耕の旁ら店を開いてゐたのであらう。しかしそれにしても、すでに店と稱すべきものが、文化頃には二軒に過ぎなかつたが、天保には少なくとも五軒は算へられよう。それだけ百姓の生活は向上すると共に、生活そのものは苦しくなつたやうである。この點は他の方面から、例へば純粹の百姓でない家が漸次に大きくなつて行くことに依つても、證明されるが、後に例を以つて説明しよう。

五

各百姓の大小の程度を知る上に、利用されるのは「人別帳」等に時に記されてある持高である。上泉村について云ふと、「人別五人組帳」のあるものにその記載がある。しかしそれ等の持高の記載が果して信頼し得るものか如何かと云ふと、かなりの疑問がなくてはならない。例へば相當の持高の百姓であるにも拘らず、戸主一人の名前だけを記載するに過ぎず、疑へば人別帳ばかりの者ではないかと思はれる者がある。従つてこれだけを以つて、直ちにその農村

の階級構成を云々することは頗る危険である。同じ村に關する他の資料に依つて十分検討された後でなければ、斷定し得ないものである。しかし私は未だそれをなし得るまでに至つてゐない。そこでこゝでは他の方面から再び考察する準備として、暫定的に前掲の資料のみに依つて、換言すれば「人別五人組帳」に示された持高をそのままに信頼して、次ぎの議論を進めることとする。繰返して云ふが、それは必ずしも階級構成を明示するものではない。單にある種の傾向を示唆するに止まる。

上泉村の持高は寛政五年に於いて五百五拾石四升九合、寺持高が貳拾五石三斗九升、下泉村越石壹石九斗九升五合、押切村越石貳拾貳石壹斗三升、東水代村越石が五斗八升九合、下河原田村越石が貳斗四升七合、郷藏式壹斗、無地高四拾三石九斗三升四合、合計六百四拾九石九斗三升四合である。越石等はこゝでは問題でない。持高が如何に配分されてゐるか問題である。上泉村に於いてはあまり大なる高持の者はない。明和二年に八郎右衛門なる者が三拾石貳斗貳升四合を有してゐたのが最高である。當時の分限帳等を見ると、所に依つては何萬石と云ふやうな大地主があつたやうであるが、それ等から見ると、全く小地主の分裂である。

さて今利用し得る「人別五人組帳」は明和二年、同四年、安永七年、天明六年、寛政五年の五冊である。それ等は何れも各家の持高を明記してゐる。それに依つて先づ二十石以上、五石以上、五石以下として假りに大、中、小に分ちさらにその各々を三分して表に作つて見ると、大體次ぎの如くなる。（かく年代が離れ離れに存することは、その資料價值を幾分低下するが、この場合全く止むを得ない。）

徳川後期に於ける農村人口の一例

六〇 (八〇六)

年	大農			中農			小農			總計
	以上三十石	廿五石以上	二十石以上	十五石以上	十石以上	五石以上	一石以上	一石以下	零	
明和二年	一	一	一	六	一〇	一九	二〇	八	三	七〇
同四年	〇	三	二	五	六	八	二一	三五	一九	七〇
安永七年	〇	二	二	四	三	一一	二七	四一	一八	二三〇
天明六年	〇	〇	三	三	七	八	二七	四二	一六	〇三三
寛政五年	〇	〇	二	二	六	一一	二七	四四	一八	〇二〇

以上に依つて見ると、この約三十年ばかりの間に大農小農共に減少して、大體中農が増大してゐる。土屋喬雄氏の「前掲論文中の例を探ると、筑後國三池郡加納開村が同様の傾向を示してゐるらしい。何故かう云ふ形態を探るやうになつたかは、容易に断定し得ない。又資料が不足であるためにもつと永い年月について見ることが出来ないのは甚だ遺憾である。

そこで私は前にも述べたやうに各戸について、戸別毎に表を作成して見た。「宗門改帳」等に依つて、寶曆九年から寛政十一年まで四十一年間の各戸の變遷は大體辿ることが出来た。その以後は少しく資料が不足し、連絡が不明瞭である。上記の四十一年は徳川期全體から見れば、甚だ短期間ではあるが、農村に於ける各家々の盛衰の有様を知り得て、かなり興味を覺えた。今上記の持高の變化をこれに加へて表を作成すると、一層明瞭である。少しく煩雜ではあるが、左に掲げる。各戸の名稱を一一挙げることは煩雜であるから、數字を以つて示す。

戸	寛政五年		天明六年		安永七年		同四年		明和二年	
	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石
1	22.7	23.1	23.1	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5
2	14.4	15.2	15.2	16.3	16.3	16.3	16.3	16.3	16.3	16.3
3	—	(72)=入ル	(72)=入ル	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1
4	9.8	9.4	9.4	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1
5	1.6	1.4	1.4	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1
6	10.3	9.3	9.3	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5
7	8.2	10.3	10.3	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9
8	12.1	13.1	13.1	11.5	11.5	11.5	11.5	11.5	11.5	11.5
9	20.1	24.5	24.5	25.3	25.3	25.3	28.7	28.7	30.2	30.2
10	—	—	—	—	—	—	(48)=入ル	(48)=入ル	0	0
11	15.3	15.4	15.4	14.6	14.6	14.6	14.1	14.1	14.1	14.1
12	8.7	8.7	8.7	8.9	8.9	8.9	8.7	8.7	8.7	8.7
13	6.1	5.8	5.8	8.5	8.5	8.5	23.7	23.7	18.2	18.2
14	18.6	23.3	23.3	26.5	26.5	26.5	28.6	28.6	21.3	21.3
15	7.5	7.9	7.9	6.4	6.4	6.4	6.5	6.5	6.5	6.5
16	12.1	8.9	8.9	8.4	8.4	8.4	6.9	6.9	6.9	6.9
17	4.1	6.2	6.2	12.2	12.2	12.2	16.7	16.7	18.3	18.3
18	8.2	7.3	7.3	7.2	7.2	7.2	5.6	5.6	5.0	5.0
19	18.8	18.8	18.8	21.7	21.7	21.7	27.4	27.4	27.4	27.4
20	2.7	2.6	2.6	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8
21	3.7	6.2	6.2	4.3	4.3	4.3	2.2	2.2	2.2	2.2
22	13.4	19.6	19.6	17.9	17.9	17.9	15.1	15.1	14.8	14.8
23	6.4	6.4	6.4	6.4	6.4	6.4	3.7	3.7	3.7	3.7
24	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	5.7	5.7	5.7	5.7
25	7.7	7.7	7.7	7.9	7.9	7.9	7.9	7.9	7.9	7.9
26	10.8	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1	6.8	6.8	6.5	6.5
27	2.1	3.1	3.1	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4
28	9.5	9.7	9.7	9.9	9.9	9.9	9.9	9.9	10.2	10.2
29	—	—	—	12.2	12.2	12.2	17.7	17.7	17.7	17.7
30	13.1	12.3	12.3	14.6	14.6	14.6	11.8	11.8	11.8	11.8
31	9.5	8.8	8.8	9.2	9.2	9.2	6.6	6.6	6.6	6.6
32	—	—	—	—	—	—	0.5	0.5	0.5	0.5
33	5.2	5.2	5.2	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6
34	0.4	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8
35	4.7	1.9	1.9	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
36	0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
37	16.1	16.1	16.1	18.9	18.9	18.9	18.9	18.9	17.3	17.3
38	—	—	—	—	—	—	—	—	絶家	絶家
39	8.7	7.5	7.5	7.4	7.4	7.4	7.9	7.9	7.9	7.9
40	5.1	7.4	7.4	7.9	7.9	7.9	8.8	8.8	8.8	8.8
41	8.2	8.5	8.5	6.1	6.1	6.1	3.9	3.9	1.8	1.8

徳川後期に於ける農村人口の一例

六一 (八〇七)

	寛政五年	天明六年	安永七年	同四年	明和二年
	石 3.2	石 1.5	石 1.1	石 1.4	石 1.4
	—	—	0.1	0.1	水呑
	5.5	5.4	1.6	1.0	1.6
	1.1	1.1	1.3	1.3	1.3
	3.5	0.9	1.7	1.7	1.7
	—	—	—	0.2	0.2
	3.5	3.5	3.7	3.6	3.6
	4.1	4.1	4.7	4.7	4.7
	9.1	9.1	9.5	9.5	9.5
	—	—	—	0.1	0.1
	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8
	4.4	3.5	3.5	2.1	1.7
	12.0	12.0	9.3	8.9	7.3
	6.6	7.4	6.6	6.6	6.6
	8.7	8.6	8.7	8.7	8.1
	5.8	9.6	9.8	7.2	7.2
	16.6	14.4	13.3	10.4	10.4
	8.1	8.1	6.3	6.3	5.9
	11.7	11.7	11.7	11.7	11.7
	5.3	5.2	2.5	1.7	1.7
	7.7	7.7	7.7	1.0	1.1
	3.3	4.2	5.1	5.1	5.1
	5.3	5.2	6.4	11.4	11.4
	14.8	19.9	13.2	18.4	18.4
	6.8	4.6	3.4	3.6	3.2
	3.8	4.7	3.4	2.3	2.3
	5.7	5.2	6.4	6.6	6.6
	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1
	4.6	4.6	2.2	2.2	地借
	—	—	—	—	地借
	15.4	18.3	7.5	7.5	—
	—	(65)=入ル	—	—	—
	5.3	3.4	—	—	—
	12.1	11.5	—	—	—
	4.6	—	—	—	—
	8.5	—	—	—	—

以上七十七戸の内、寶曆九年以後、寛政十一年までに、新たに創設せられた家は、第七十號以下の八軒である。その内、第七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、の六軒は何れも分家したものであつて、他から移住して来た者は第七十、七十一の二軒に過ぎない。如何に農村の移動の少なかつたか、解る。しかしこれより後期

になると、もつと移動が激しかつたやうである。以上の内、廢家となつたものは、第三、十、二十九、三十二、三十八、四十三、四十七、五十一、七十一、七十三の十軒である。これを前述の大、中、小の三分類に割宛てると、大農二、中農二、小農六となる。小農の廢家の最も多いのは當然であらう。しかし前項に於いて指摘したやうに、時に實際は全然なくなつた場合でも記載されてゐることがあるから、殊にそれが大農の場合に最も多いやうに思はれるから、實際の大農廢家の数はこれよりも少しは多かつたのであらう。廢家の原因が何處にあるかは、容易に覗ひ得ないが、各個々に調査した結果、帳簿上からだけ推測し得る點を述べると、四つに歸せられる。(1)死滅に依るもの、(2)出家に依るもの、(3)分家せるため、(4)離村の四つである。しかしこれ等の原因が相互に作用してゐることは云ふまでもない。後に掲ぐる例に依つても明かである。これ等の中、最も多いのが一の死滅であつて、第二十九、三十二、三十八、四十三、四十七、五十一の六家とも死に絶えてゐることになる。しかしこの中には、前掲出奔人の例の第五のやうなものも、表面上死滅に依る廢家の中に勘定されるから、中には出奔離村に基くものゝ中に、入るべきものもあるかも知れない。出家に依るもの(第十號)、離村(第七十二號)は何れも一つであるが、分家に原因すると考へられるものが二つあり、それは多少説明を要することと思ふ。

分家は元來百姓を困窮に導くものとして、熊澤蕃山の「たわけ論」以來、當時の識者の排斥するのみならず、幕府徳川後期に於ける農村人口の一例

も法制を以つて、これを嚴禁せんとしてみた。寛文十三年の分地制限令以後、屢々同様の禁令を下してゐるが、今こゝに享保六五年七月のものを一例として掲げて置かう。

田畑配分之定
右之定よりすくなく分候儀停止たり尤分方ニ不限残り高も此定よりすくなく残へからず然る上ハ高貳拾町地面二町よりすくなく田持ハ子供を始諸親類之内江田地配分不能成候間厄介人有之者ハ在所ニ而耕作之働キ而渡世致させ或は相應之奉公人ニ可差出事出...

もしてこの法令を嚴重に適用すれば、上泉村の場合の如きは、極めて少數者を除き、分家不可能である。今前に擧げた六軒の分家及び本家の持高を見ると次ぎの如くである。
(72)の龜右衛門は七石五斗五升八合、明和九年、本家兄久米右衛門(3)十三石五斗二升一合より父と共に分家、従つてこの場合には本家たる兄の方が持高が少なくなり、天明三年には妻子を連れて行衛不明、母は弟と分家に入る。分家に依る廢家の第一例である。勿論この場合には家庭的事情がその原因として十分想像される。

(73)の彦之丞は明和九年頃本家兄安右衛門(65)から母と共に分家した。本家は拾八石四斗であつたが、分家後の兩者の石高を見ると、安永七年に本家は拾三石貳斗貳升九合、分家は七石四斗六合である。如何なる事情か、安永九年三月十四日に出奔して、母は本家に歸つた。分家の失敗せるものとして、その第二例としたのである。天明六

年の石高が著しく多くなつてゐるのは、分家の持高の一部又は全部を合併したためであらう。寛政五年に持高の激減した理由は解らない。これから後の分は何れも分家本家共繼續せるものである。

(74)の五郎兵衛は太郎右衛門(26)の父が養子とした者で義弟になる。太郎右衛門の死後、天明三十四年の頃分家したが、これは持高を分割したのではなかつた。従つて分家ではあるが、田畑配分の法令には全然問題とはならない。因みに分家以前のこの家は家族數の最も大なる例であり、男五人、女六人、十一人の家族であつた。十一人と云ふのは他に一二の例があるが、他は大部分、四人、五人、六人である。

(75)の要右衛門の本家は高三拾石貳斗貳升四合の最大の百姓であつた八郎右衛門(9)である。天明六年に分家し、本家は姉婿富右衛門が襲名相續し、持高は二十四石五斗八升一合であつた。しかしこの家はすでに安永七年に貳拾五石三斗四升九合になつてゐるから、この分家も田畑を分割したのではなかつたやうである。分家の高は拾壹石五斗一升貳合であり、もし分割したものとすると、合法的な例となる。

(76)の與七は高貳拾六石五斗八升壹合の百姓次助(14)の弟勘六の子供である。この家も大家族の一つであつた。天明五年次助が死に、その子の傳七が戸主となるや、間もなく母と共に分家してゐる。分家直前の持高は二十三石三斗八升であるが、分家後、本家の持高は十八石六斗二升三合に減じ、新家は四石六升六合であるから、恐らく持高を分割したものであらう。法令に合しないことは云ふまでもないだらう。

最後に(77)の磯七は百姓藤左衛門(22)の次男である。これも大家族の一つである。天明六年に十九石六斗四升七

合の家であるが、寛政の初年に妻子を連れて分家し、本家は十三石四斗四升五合となり、分家は八石五斗二升五合であつた。恐らくこれも田畑を一部は分割したものと見てよからう。

以上分家六軒の例を説明したのであるが、田畑を分割しなかつたものを除き、多くが適法ではない。勿論僅かな高持の百姓は分家を作らず、何れも高十五石以上を有する者ばかりである。しかしこゝに十石以下の分家を作り、小高の百姓を増加させたことは事實である。幕府の厳格な法令も、かの有名な田畑永代賣買禁止の法令と同じく、實際に於いては大した効果を擧げ得なかつたものと断定出来るであらう。

以上の事實からかう云ふことが出来ると思ふ。大農又は中農の上は分割されて、中農に入り、中農の数を増加せしめ、小農は貧困のため、相續者が出奔その他により断絶し、廢家となつて、その数を少なくしてゆき、結局中農に比して、大農、小農の減退を見る。しかしそれでは中農は如何なつたか。再び前掲の各戸持高の變化を吟味して見よう。

廢家になつたものと、變化状態を知り得ないものを除いて、六十六軒についてその變化の傾向を見ると、かなりの向上發展を示したものの二十一、殆ど同一状態にあるもの二十七、やゝ衰へたもの八、相當衰へたもの十となる。そして特に注意すべきは、小農から中農になつた者の多いことである。その数が九を算へるのに對して、中農から小農に落ちた者は三に過ぎない。しかもそれ等の小農から中農になつた者の中、少なくとも三軒は農間に他業を營んでゐる者であつたことは興味あることである。一二例を擧げると、(41)の忠次右衛門は夫婦子供と四人暮しであ

るが、長男を江戸奉公に出し、豊石八斗五升の小百姓で、旁ら大工を兼てゐた。安永二年には下男を置き、六石壹升四合の高持となり、次代の政右衛門の時に至つて、八石五斗三升四合まで増加してゐる。又(35)は明和二年に僅かに貳斗八升の小百姓であつた幸八なる者の一家であるが、娘がめに養子を迎へ、その養子吉右衛門の代になつて、店を出し、その後下女さへも雇ひ、寛政五年には五石以上にはなり得なかつたが、四石七斗二升四合の高持となつてゐる。これ等から直ちに商工業を營む者がすべて有利であつたとは断定し得ないが、兎に角さうした新職業が漸次に多くなるべき理由の一端を示してゐるわけである。

中農から大農となつた者は一人もない。土地の兼併が少なかつたことを證明するものである。少なくとも帳簿上に於いては、この變化は見られない。大農から中農になつた者は三を計へるが、その内分家に依るものは一つで、他は個人的事情に基くものゝやうである。これは二十石以上を大農としたがためである。幕府が獨立の農民の基準とした高十石を標準として、前掲五つの年の數を比較して見ると、次ぎの如くなる。

十石以下	50	51	47	48
十石以上	20	19	18	19

以上は僅か四十年間ばかりの變化に過ぎないから、もとよりこれから何等の結論をも導き出すことは出来ない。唯増大せる中農はすでに當時の經濟生活の負擔に苦しむ者であつた。天明六年の「田畑質地作切書入扣帳」を見ても、そこに記載されてゐる八名の質入主が全部中農であることをだけでも、彼等の生活がかなり逼迫してゐたことを想像

することが出来よう。これ等農村の経済的負擔の問題は他日これを明かにしたいと思つてゐる。

六

以上私は主として、「人別五人組帳」と「切支丹宗門改帳」とを基礎として、その確實性を吟味しつつ、上泉村の徳川時代後期に於ける人口について説明を試みたのである。最初の計畫では最後に人口の移動を明かにするために、他村との關係を明かにするつもりであつたが、未だ資料の整理が不十分であり、かつこの問題は同村の貢租關係その他の經濟問題を明かにした後に述べる方が便宜であると考へたので、敢てこれを省略することにした。

この研究に於いて最も困難に感じたのは、原資料が果して正しく事實を傳へてゐるか如何かと云ふ點であつて、同一事實に對してもかなり區々な記述をなしてゐるため、動もすればその確實さに疑念が抱かれ、確たる一つの結論を斷定することを得なかつた。唯さうした疑念から出来る限り資料の確實性を明かにせんとした結果、従來農村人口の減退を人別帳等の數字から、むしろあまり甚しくないと考へてゐたことを訂正すべきではないかと思ふやうになつた。農村に於ける人口は徳川時代後期に於いて、著しく減退したものであらう。これは所謂通説を裏書することになる。しかしその減退は主として財政的負擔と當時の社會的環境に影響されたものと見られる。唯人別帳以外の農村の住民はどのくらいあつたのか。もしこれがあまり多くないとすれば、明治初年に於ける人口數との相當大なる開きは如何説明するか。この點については農村人口の性別及び年齢別に關する研究をなした後になさるべきであると考へる。

上泉村のやうな場合は中農の増加に依つて、表面上は一村の中堅的分子の増大されたやうに見えるが、事實は一村全體が漸次的に衰頽に向つた一つの形態と見られる。そして恐らくは結局に於いて比較的富有なる隣村に對し從屬的地位に立たざるを得なくなる一つの過程であらうとも考へられる。かうした形態が一般的であるか如何かは、さらに幾多の農村について研究した後でなければ斷言し得ない。又上泉村についても、なほ他の諸資料を調査して後に、始めて右の斷定を下し得るものであつて、この論文に於いては、未だ單に上述の傾向あることを指示し得た程度を以つて、満足するより外ないのである。この論文の劈頭にも述べて置いたやうに、一つの暫定的な試論である。これが完成は今後の資料蒐集と研究とに依つてなさるべきものなのである。

昭和十年五月二十二日稿